

2. 結果と考察

飼育結果を表4に示す。500ℓ水槽と1,000ℓ水槽を使用してカキsp幼生の投与量をそれぞれ3段階に分けて飼育を行なったが試験区別には大きな歩留りの差はないようである。

昭和53年度における飼育試験では全長で3.8mmからはシオミズツボワムシを摂餌することが分かっているが飼育水温が25℃以上であればふ化後7

日目で3.8mmに成長することから、カキ幼生の投与期間は5日間でもいいことになる。1日あたりの投与量を10個/cc以内としてワムシと併用投餌していき、仔魚の成長をみながらワムシ単独給餌に

切り換えていくようにする。カキ幼生投与量が少なければそれだけ作業の省略化ができるものと思われる。1～6区とも10日目以降ワムシ単独投与で継続飼育したが12日目あたりから斃死が目立ち始め、20日目までには全滅状態となった。仔魚の尾ビレに白っぽく綿状の付着物があり、検鏡してみるとスリ切れた状態であった。高水温に影響があると思われるが原因不明である。

表4 飼育結果

区分	10日目 取り揚げ尾数 尾	全長 mm	歩留り %
1区	2,200	3.9～4.2	11.0
2 "	1,750	"	8.7
3 "	3,150	"	15.7
4 "	6,800	"	13.6
5 "	8,800	"	17.6
6 "	6,350	"	12.7

III 屋外60t大型水槽による飼育試験

1. 材料と方法

水槽は屋外の4×10×1.7m(有効水量60t)を2面使用、1区は5月30日、5月31日、2区は6月11日、6月12日に採卵した分の浮上卵をそれぞれ収容した。飼育水は卵収容時からふ化後2日目までは30t、ふ化後3日目から海産クロレラや生海水を徐々に注水してふ化後15日目までに満水の60tになるようにした。25日目までは昼間流水、それ以降取り揚げまでは24時間流水とした。

表5 各区別の収容卵数

エアーストンは

10個設置し、通気量は2ℓ/分程度からスタートし、仔魚が成長するにつれて徐々に増加させた。

区分	収容月日	収容卵数 粒	ふ化率 %	ふ化尾数 ピ	収容密度 ピ/ℓ
1区	5月30日	552,000	97.39	626,400	10.4
	5月31日	96,000	92.50		
2区	6月11日	816,000	45.58	700,000	11.6
	6月12日	408,000	80.58		

餌料はカキsp幼生、シオミズツボワムシ、チグリオパス、マダイ稚魚用人工配合餌料の系列で投与し一部は併用する期間もある。特にカキsp幼生は給餌量が絶対的に不足でワムシとの併